

バケツドラムで STOMP

— オーディエンスを意識したパフォーマンス能力の育成 —

STOMP with Bucket Drums: Development of students' performance skills focused on an audience

音楽科 水本 肇

1. はじめに

本校国際中等教育学校では、現代社会にはびこる諸問題について多面的に捉え、問題解決を提起できる能力、また、グローバルな社会でリーダーシップを発揮できる生徒の育成を目指している。さらに、昨今より課題研究、探究活動の重要性が国内でも取り上げられており、IB のカリキュラムにおいても、授業で扱う単元を6つのグローバルな文脈のいずれかに位置づけ、探求的な問いについて活動することが言及されている。同時に、学習を教科の範囲内に留めるのではなく、他教科の単元や知識も活用した教科横断的な学習「学祭的単元 (Interdisciplinary)」、すなわち、より現実社会と結びついた学びを形成することで、グローバルな人材を育てられるとある。

このことから、本校音楽科では複数の教科要素が必要となる単元「ショートムービー制作」を継続的に中等2年生で実施し、これまでの本校研究紀要や公開研究会の場で提案してきた。今年度は視点を変え、中等3年生を対象としたリズムアンサンブルの発展形となる「バケツドラムで STOMP」という単元を開発し、実施した。この単元のねらいは、海外で盛んにおこなわれている STOMP パフォーマンスを知ること留まらず、これらの創作活動を通じて生徒がグローバルな現場に対応するためのコミュニケーションツールを増やせることを期待している。また、変化する芸術形式、芸術と観衆・聴衆の関係に対する理解を深め、現代に必要とされている、より効果的なパフォーマンスを考え、身に付けることを目指した。

2. 単元の概要

2. 1 単元開発と目的

バケツドラムとは、プラスチック製のペール缶やポリバケツを「ドラム」として見立ててドラム演奏をすることであり、近年、国内のメディアでも取り上げられるようになった。日本国内では、2015年5月におこなわれた Tedx NagoyaU においてスピーカーとして登壇した、バケツドラマーの MASA 氏が中心となって活動をしている。

また、25年以上の活動実績を持つイギリス発祥の STOMP は、ダンスとリズムを掛け合わせたパフォーマンスグループである。ボディパーカッションはもちろん、家具や工具、廃材などをリズムカルに叩き、オーディエンスを巻き込んだパフォーマンスも魅力の一つである。ニューヨークのロングランオフブロードウェイにもなっており、2002年には日本人として初の STOMP メンバーに合格した宮本やこ氏が10年以上にわたって活動を続けている。

「バケツドラムで STOMP」はこれら二つの要素を組み合わせた単元であり、その意図としては大きく二つのことが挙げられる。これまでに学習したリズムの知識や、体得した技術を応用させ、より高度なリズムアンサンブルを目指すことはもちろん、オーディエンスを魅了し得るパフォーマンスを考え、演奏するということである。オーディエンスを巻き込める効果的なパフォーマンス能力、ソロの演奏も含めたアンサンブル能力の向上を目指した、リズムアンサンブルの発展系として開発、および実施を試みた。

2. 2 MYP Unit Planner

+Teacher(s)	Hajime Mizumoto / 水本 肇	Subject group and discipline	Arts (Music) / 音楽		
Unit title	STOMP with a bucket drum	MYP year	Year 4	Unit duration (hrs)	
単元のタイトル	バケツドラムで STOMP パフォーマンス	MYP 年	(中等 3 年生)	単元の長さ (時間)	10h

Inquiry: Establishing the purpose of the unit

Key concept 重要概念	Related concept(s) 関連概念	Global context グローバルな文脈
Change / 変化 (Aesthetics / 美意識 も可能)	Expression / 表現 Audience / 観衆・聴衆 Boundary / 境界	Globalization and sustainability / グローバル化と持続可能性
Statement of inquiry 探究テーマ		
Statement of inquiry : In order to maintain relationship with Society, techniques, media, tools, and even expression methods must be changed with the times. 探究命題：社会との関連を保つため、職人技、媒体、ツール、果ては表現方法まで、時代とともに変えなくてはならない。 (可能なプロジェクト学習例) ・様々な芸術媒体と材料の探索 ・職人技の様々な形式 ・年代を越えた芸術		
Inquiry questions 探究の問い		
Factual— 事実的 ・リズムによる芸術 (パフォーマンス) は何が魅力なのか ・芸術形式は時代、時間とともにどう変化してきたか Conceptual— 概念的 ・リズムによる芸術はどのように自分と他者に、そして社会に影響を与え、変化を起こせるのか ・効果的、あるいは魅力的なリズムは何を生むのか Debatable— 議論できる ・社会に受け入れられる芸術形式は、いつ変わるべきなのか ・伝統は社会から離れていくのか		

Objectives 目標	Summative assessment 総括的評価
<p>MYP Arts Guide 学習発展計画 p.14~より、MYP Year 4 (第3年次)</p> <p>目標 A : 知識と理解</p> <p>i. 概念、プロセス、適切な言語の使用を含め、学習した芸術形式に対する知識を示す。</p> <p>(ii. 当初の、または変化した文脈での芸術形式の役割に対する知識を示す。)</p> <p>iii. 芸術作品を特徴づけるために獲得した知識を活用する。</p> <p>目標 B : スキルの発展</p> <p>i. 学習した芸術形式に関するスキルと技術を獲得し育成したことを示す。</p> <p>ii. 芸術を制作、上演、発表するためにスキルと技術の応用を示す。</p> <p>目標 C : 創造的思考</p> <p>(i. 明確で具現可能な芸術的意図の概略を述べる。)</p> <p>ii. 代案、視点、想像的な解決策の概略を述べる。</p> <p>iii. 発展プロセスから具現化段階までのアイデアの探索を示す。</p> <p>目標 D : 鑑賞 (反応)</p> <p>i. 関係の概略を述べ、学習したことを新たな場面に伝達する。</p> <p>ii. 自分の周りの世界から発想を得て芸術的反応をする。</p> <p>iii. 自分と他者の芸術作品を評価する。</p>	<p>Outline of summative assessment task(s) including assessment criteria:</p> <p>観点 A</p> <p>i. 他校の参考動画を分析し、リズムやパフォーマンスについて特徴を捉える【ワークシート】。</p> <p>iii. 参考動画から得られたリズムやパフォーマンスを応用して、自分たちなりの表現を提案する。</p> <p>観点 B</p> <p>i. 和太鼓のリズムを含む、基礎から応用的なリズムの学習【実技】。</p> <p>ii. 中間、本番発表でのパフォーマンスを含む実技評価【動画記録】。</p> <p>観点 C</p> <p>ii. ソロやパフォーマンスを含む、全体の構成案をスケッチする【ワークシート】。また、個人、およびグループ活動のプロセスを記述する【プロセスシート】。</p> <p>iii. 【ワークシート】に、音符・言葉・描写などでリズムとパフォーマンスの具体案を示す。また、動画などで具体案をグループに提示する【プロセスシート】。</p> <p>観点 D</p> <p>i. パケットドラマーMASA氏のTedxスピーチ鑑賞を通じて、芸術表現としてのリズムが与える社会への影響について考える。</p> <p>【ディスカッション・レポート】</p> <p>ii. 視聴した作品、および全体の活動に対し、他教科、他ジャンルの知識や経験と関連付けて振り返る【レポート】。</p> <p>iii. 他のグループの発表を視聴し、それぞれに芸術的評価をおこなう【相互評価シート】。</p> <p>Relationship between summative assessment task(s) and statement of inquiry:</p> <p>観点 A と対応する課題や活動では、参考動画の分析を通して、リズムによるパフォーマンスの魅力について理解を深める。また、プロによる多様で多彩なリズム演奏の取り組みを知ることで、上演＝ステージ上というイメージを払拭し、現代人が求める芸術形式、発表形式について思考する。</p> <p>観点 B の課題と活動では、実際の演奏体験を通して「演奏を見て感じる魅力」と「実際に演奏して感じる魅力」の差や共通点を明らかにし、それらを踏まえて「リズムの魅力」や「効果的な、あるいは魅力的なリズムから生まれること」について考察する。</p> <p>観点 C に対応する課題や活動は直接的ではないにしろ、「概念的な問い」にアプローチするうえで有用である。自他の考案してきたリズムやパフォーマンスが周りにどう受け入れられ、また受け入れられないのか、生徒は互いに知ることとなる。これは、互いのリズム感や好みの音楽的傾向を共有するだけにとどまらず、むしろ互いの芸術的価値観に揺さぶりをかけることとなる。</p> <p>この根拠は、生徒から提案されるリズムやパフォーマンスの特徴や傾向は、それぞれのバックグラウンドによって大きく異なること、また、それらは他国の文化が大きく影響しているためである。</p> <p>観点 D で評価する相互評価の活動は、探求の問いの「事実的な問い」をより理解を深める上で必要となる。生徒が自他の作品、およびその演奏を評価することでリズムの魅力を追求することができる。また、プロの演奏家によるTedxでのスピーチは、芸術としてのリズムが社会でどう評価され、また社会にどのような影響を与えているかを考える上でも参考となる。</p>

Approaches to learning (ATL) 学習の方法
<p>I. コミュニケーションスキル Communication skills</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意味のあるフィードバックを与え、受け取る ・批判的に、そして理解するために読む <p>II. 協同スキル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・合意を形成する ・他者の見解や考えに積極的に耳を傾ける <p>III. 情報リテラシースキル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メディアコミュニケーションを分析し解釈するために、批判的リテラシースキルを用いる

Action: Teaching and learning through inquiry

Content 内容	Learning process 学習の過程
<p>0. 単元のオリエンテーション</p> <p>1. STOMP 作品の鑑賞</p> <p>バケツドラムの演奏鑑賞</p> <p>教員によるデモンストレーション</p> <p>2. ベール缶を使ってリズム演奏</p> <ul style="list-style-type: none"> - 和太鼓の基礎リズム - 応用リズム <p>3. 創作活動開始</p> <p>既存の STOMP 演奏の分析(提出)</p> <p>パフォーマンスの例再確認</p> <p>4. グループ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> - 個人単位でソロの考案 - 全体構成の議論 - 発表に向けての練習 <p>5. 中間発表と相互評価</p> <p>6. 本番発表 / 相互評価</p> <p>7. 社会におけるリズムとその重要性についての議論</p> <ul style="list-style-type: none"> - MASA 氏による Tedx スピーチ鑑賞 - リズムの身体への影響について 	<p>Learning experiences and teaching strategies 学習の経験と教授戦略</p> <p>0. 簡単な単元の概略と、スケジュールの確認。スティックの配布と鑑賞時の記録用ワークシート配布する。</p> <p>1. 実際の評価の対象となるのは3. での鑑賞となる。ここでは、簡単に STOMP の紹介と、STOMP をアレンジした参考動画を鑑賞する。</p> <p>バケツドラムの演奏はオーストラリアを中心に活動している GORODO 氏の演奏の様子と、日本国内で活動している MASA 氏の演奏動画を視聴する。バケツをドラムとして効果的に使うためのスキルを動画から学ぶ。</p> <p>教員によるデモンストレーション演奏では入場の仕方やソロパフォーマンスを意図的に提示し、生徒にとって参考となるスキルを提示する。</p> <p>2. 実際にベール缶を一人一つ叩く。コールアンドレスポンス形式で授業者の叩いた4拍リズムのコピーをし、リズムの学習を進める。その際、和太鼓のリズムも学習し、右打ちと左打ちの正しい叩き方も評価の対象とする。なお、4人から5人の単位で、基礎的なリズムから応用的なリズムまでを実技試験で確認する(動画で撮影)。</p> <p>3. 他校の STOMP 演奏動画を視聴し、どういったパフォーマンスが魅力に感じたか、あるいは、自分たちの創作に取り入れたいと思ったか、理由と共にワークシートに記録する。</p> <p>特に、同じ高校生による演奏は親しみやすく、アイディア想起の一助となる。</p> <p>4. グループごとに3分間以内の STOMP 曲を創作する。</p> <p>ソロを含む全体の構成やパフォーマンス案を個人単位で考え、グループで案を共有し、3分以内のリズム曲を創作する。また、創作の条件としては以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3分以内であれば曲が複数となっても良い。 ・必ず一人一回以上、8拍以上のソロ演奏をおこなう。 ・自分のバケツを叩くだけでなく、自分以外の人のバケツも叩くなどの「合体技」も取り入れ

	<p>ること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バケツ以外を使用しても構わない。ボディパーカッションも可能とする。 ・バックダンスは不可。ただし、STOMP の演奏範囲での振り付け、リズムを形成する体の動きは全て許容する。判断しにくいものは事前に授業者に相談すること。 ・他校の演奏動画は参考程度にすること。全く同じ演奏をすることは不可。ただし、動画中のパフォーマンススキルを模倣しても良い。 <p>5. 中間発表では進捗状況を学級で共有し、互いにフィードバックをする。</p> <p>その際、ループリックを用いて、各グループの良いところ、改善点を挙げて評価する。</p> <p>6. 本番発表ではコンセプトの説明なども含めて発表する。</p> <p>相互評価シートには各グループの評価、および自グループの作品と取り組みに対する評価と振り返りを記述する。</p> <p>7. 全体の活動を振り返り、リズムの魅力とその必要性や重要性について議論する。また、MASA 氏のスピーチの鑑賞、およびリズムの身体への影響についてのプレゼンを通して理解を深める。※2017 年度は授業数の事情により、レポート課題は未実施</p> <p>Formative assessment 形成的評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎リズム、応用リズムの実技試験（動画記録） B ・既存作品の鑑賞と分析 A ・アイデア記録（楽譜、言葉、描写ふくむ）ワークシート、プロセスシート作成 C ・中間発表、本番発表の相互評価シート、および振り返り D <p>Differentiation</p> <p>様々なレベルの生徒の学習ニーズにどう対応するか。</p>
<p>Resources 教材</p> <p>●教具・準備物</p> <p>ドラムスティック 3 組 1,500 円 ヒッコリー材／ペール缶（プラスチック製）24 個 単価 1,380 円／ポリバケツ大 3 個 単価 4,890 円</p> <p>●ワークシート等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション資料（スケジュール）／リズム案、パフォーマンス案書き出しプリント ・プロセスシート（個人、グループ含む）／中間発表、本番発表用、相互評価シート <p>●鑑賞教材</p> <p>「Stomp Live – Part 3 – Just clap your hands」, <https://www.youtube.com/watch?v=I0XdDKwFe3k> 2017年6月21日アクセス。</p> <p>「BlueManGroup – Medley(Melodi Festival 20-02-2010」, <https://www.youtube.com/watch?v=fLIxq5TaL4> 2017年6月21日アクセス。</p> <p>「Tomoe – Blue Man X Kodo」, <https://www.youtube.com/watch?v=sl1nEZo6pul> 2017年6月28日アクセス。</p> <p>「北吹ストンプ」, <https://www.youtube.com/watch?v=NS-yXQqOKV8> 2017年6月28日アクセス。</p> <p>「【アンサンブル】ストンプ 幕張総合高校」, <https://www.youtube.com/watch?v=OKUvX3IsiRo> 6 月 28 日アクセス。</p>	

Reflection: Considering the planning, process and impact of the inquiry

振り返り

Prior to teaching the unit ユニットを教える前	During teaching 教えている時	After teaching the unit 教えた後
<p>教材・教具の準備</p> <p>プラスチック製のペール缶やドラムスティックの購入には特に問題はなく、また、参考動画もインターネット上に豊富にあるため、教材、および教具の準備は比較的円滑におこなえた。</p> <p>しかし、教員のデモンストレーションに関しては工夫と時間が必要となり、生徒の模範となるレベルの演奏ができるようになるまでには、まとまった時間が必要となった。</p> <p>生徒が課題に前向きに取り組むための動機付けにも大きく関わり、また、今年度は参考となる他学年の過去作品がないため、この点は参考動画に頼らざるを得ず、生徒に求める作品の完成形を、生徒にイメージさせることが困難だと感じた。</p> <p>ワークシートの作成にも他の単元と比べて工夫が必要となった。個人での活動の評価を想定し、リズムやパフォーマンスのアイデアを記入する欄をできるだけフレキシブルとなるよう設計した。それと比べて、グループ活動を含めたプロセスの記入、中間、本番発表の相互評価シートは他の単元と大きく変わることはなく、少ない調整で済んだ。</p> <p>ドラムスティックの紛失が心配されたため、その対策としてスティックの柄の部分にイニシャルを書いたり、個人の物とわかるマークなどを付けたりすることを想定した。</p>	<p>生徒の課題理解と取り組み</p> <p>生徒にとって、リズムだけで演奏することは初めてではなく、むしろボディパーカッションなどの単元で表現の工夫や創作をおこなってきた。</p> <p>それにも関わらず、今回の単元での創作にあたっては、多くの生徒が創作に苦労していた。傾向として多かったのは、何から取り組み始めれば良いかわからない、リズムの曲を作ることはわかるがどういったリズムから始めれば良いか思いつかない、というものであった。</p> <p>こういった傾向が多かったため、既存の楽曲をなぞるように叩く、メロディーのリズムに合わせて叩く、などの提案をしたところ、活動を促すことができた。すべてのグループで効果的であったとは言い難いが、感覚的にリズムを組み合わせて叩き始められる生徒もいれば、何を参考にリズムを形成しはじめれば良いのか見当もつかない生徒もいるため、こういった助言や促しは、次回以降に向けて複数用意しておく必要があると感じた。</p> <p>作品が作られていくにつれて、生徒自身もこの活動の面白さや魅力に気が付いていく様子が伺えた。また、中間発表を設定することでフィードバックを得られるだけではなく、自他の芸術センスの違いやポテンシャルを知る機会となり、互いの刺激となった。</p>	<p>STOMP という演奏形態の力を借りることで、リズムアンサンブルの質は格段に向上したと言える。しかし、オーディエンスを巻き込んでのパフォーマンスをする、という目的は十分に達成することができなかった。</p> <p>多くのグループが、リズム作品を作曲するだけで精一杯、あるいはその質を上げることだけに満足してしまい、プレーヤーとオーディエンス間にある壁を取り払う、あるいはその距離を縮めるための工夫にまで考えが及ばなかったためである。</p> <p>これは、授業者の責任が大きく、そういったパフォーマンスを例として挙げたり、参考動画の鑑賞時に指摘したりすることができないでいたためである。</p> <p>観客役（同時に評価者）となる生徒が、演奏者の演奏、およびパフォーマンスに対してよく反応し、拍手や掛け声を出していたという点で、ライブパフォーマンスとしての雰囲気づくりは十分であったと言えるが、目的とは少々ずれていると考える。</p> <p>次年度においても実施を計画しているが、最終的な探求の問いと結びつく課題の実施はもちろん、今回の反省を受け、設定した各概念や課題についても見直す必要がある。</p> <p>しかし、限られた教室環境の中、リズムアンサンブルの発展系となる単元を開発できたという点は、大きな成果と言える。より豊富なサウンド、多様な表現ができる創作活動となるよう、楽器となるバケツの材質やサイズ、また、他の楽器の導入についても再検討したい。</p>

3. 課題設定の補足、および生徒の活動

2章2項の Unit Planner において、授業の流れや課題、評価について述べたが、ここでは生徒に課した STOMP 作品の創作課題について補足する。

今回の創作活動では、単純にリズムを叩くだけではなく、オーディエンスを巻き込んだパフォーマンスを取り入れることを重視した。学級の人数の構成上、1 グループを 6 人ほどで構成し、3 分間の STOMP パフォーマンスをするというゴールを設定した。

STOMP パフォーマンスの創作にあたり、以下のように条件を提示した。

- ・ 3 分以内であれば曲が複数となっても良い。
- ・ 必ず一人一回以上、8 拍以上のソロ演奏をおこなう。
- ・ 自分のバケツを叩くだけでなく、自分以外の人のバケツも叩くなどの「合体技」も取り入れること。
- ・ バケツ以外を使用しても構わない。ボディパーカッションも可能とする。
- ・ バックダンスは不可。ただし、STOMP の演奏範囲での振り付け、リズムを形成する体の動きは全て許容する。判断しにくいものは事前に授業者に相談すること。
- ・ 他校の演奏動画は参考程度にすること。全く同じ演奏をすることは不可。ただし、動画中のパフォーマンススキルを模倣しても良い。

これに加え、単元の途中では「既存の曲に合わせてリズムを叩く」ことも許可した。具体的には既存のアニメのオープニングやアーティストの楽曲などの、メロディーと同じリズムに合わせて叩く、というものである。

また、上記の条件にもあるように、大がかりなダンスは教室環境の都合もあって不可とした。ただし、既存の STOMP パフォーマンス、パーカッションアンサンブルに見られる、リズムを形成するような身体の動きは教室環境に配慮した上で許容範囲とした。この理由としては、そもそも STOMP がダンスとリズムによるパフォーマンスであることから、一概に全てのダンス要素を不可とすることが憚られたためである。



図 1：グループ活動の様子



図 2：観点 C 個人の評価対象となる
アイデア記録ワークシートのサンプル

4. 今後の課題と改善（アンケート実施から）

4. 1 生徒の感想

今回の単元は生徒だけでなく、授業者にとっても挑戦となる単元であった。授業中の生徒の反応も様々だったが、単元後に実施したアンケートの中からいくつか生徒の感想を紹介する。

肯定的な感想	否定的な感想
身近なものでも質の高いパフォーマンスができることがわかった。	どのようなリズムを叩けば良いか思いつかない。
複数の人によるリズムを、タイミングがズレることなく鳴らせると、こんなにもキレイだということがわかった。	音が大きくて耳が痛かった。
単純にテンションがあがる。ドラムスティックがもらえたのもうれしかった。	3分間が長い。
発表となると緊張するけど、今回はいつもより楽しめた。	グループで（リズムの能力に）差がありすぎて、得意でもないのにリーダーを務めるのがつらかった。
	教室が狭くて、考えていたパフォーマンスを結局変えることになった。

4. 2 今後の改善と課題

授業者が想定していたよりも生徒が課題の意図を理解できておらず、本来の目的である「オーディエンスを巻き込めるパフォーマンスをする」には至らなかった。次回への実施に向けて、具体的にどういったパフォーマンスや工夫が「オーディエンスを巻き込むこと」になるのかを示す必要がある。また、鑑賞した参考動画の中には高度なパフォーマンスのものが多く、生徒にとっては現実離れしており、参考となり得なかったことも否めない。そのため、今回の実践例を事前に鑑賞させることで作品の完成系のイメージを持たせ、本来の目的の達成にまで余裕を持って取り組めるよう、さらに工夫を重ねていきたい。

また、授業時間の都合でディスカッションとレポート課題が未実施となり、この単元を通じて考えることのできる概念や、探求の問いへの追及が薄くなってしまった。リズム学習の効率化や課題設定の見直しをし、時間の確保が必要となる。

具体的には創作課題の改善が提案できる。3分間のすべてを一から創作させるのではなく、ある程度は既存の作品に沿わせたり、全体で取り組む定型リズムを組み込むことを許容したりすることである。そうすることによって創作に幅を持たせることができ、グループによって難易度を調整しやすくなり、また、活動に前向きな姿勢を持たせられると考える。

加えて、基礎的なリズムと応用的なリズムの学習に加え、学級全体で一つのリズム作品を学習することも効果的と考える。リズムアンサンブルで求められるリズム・構成感・パフォーマンスの傾向を学級全体でつかむことで、グループ活動時の創作に活かせられると

考える。そのためには、ソロ表現を含む、オーディエンスを魅了し得る効果的なパフォーマンスも念頭に入れた、授業に適した STOMP 作品の考案が必要である。

最後に、2017 年 8 月に高知県立高知南中学校・高等学校でおこなわれた IB 研修において、本單元について Kerry Winter 氏と Jeremy Otto 氏からご助言をいただいたことに厚く御礼申し上げる。

STOMP with Bucket Drums: Development of students' performance skills focused on an audience

Abstract

The Music Division provides a curriculum based on the IB's philosophy of education, and the attributes in a student which our school aims to develop. With an emphasis on inquiry-based learning, which is a subject of discussion these days, we have been continuously conducting course units, such as a comparative research between original and arranged pieces, and a video production that considers the relationship between video and music, which requires multiple subject elements. This year, we renewed the perspective of the Music Division and conducted a course unit called "STOMP with Bucket Drums," which has an advanced format of a rhythm ensemble, for the third graders. We hope students will develop communication tools useful in their global staged through these learning activities, more than just learning about STOMP performances that are popular overseas. Furthermore, we aim to deepen students' understanding of the changing art form, as well as the relationship between art and the audience, for them to think about and acquire more effective performances that are required in modern times.